

2014年1月10日 発行

森三郎刈谷市民の会

「森三郎の作品を読む会」

どなたでもいつの会でも参加できます

二〇一三年十二月の「森三郎の作品を読む会」では、『赤い鳥』昭和七年九月号初出作品の「犬」と「藤五三郎」を読みました。

「犬」は、(童話)となっているが、冒頭の

「清少納言は、一条天皇さまのお后の、中宮定子とまをしあげたお方につかへてみました」という文から、すぐに清少納言の「枕草子」を元にしていてと分かる話である。「枕草子」七段の「うへにさぶらぶ御猫は」の内容にほぼ忠実に、子どもにも分かるように書いている。しかし、これはただ口語訳しているわけではなく、人物の関係、当時の宮中で犬や猫が飼われていた様子などが整理して書かれている。

この話は、一条天皇の愛猫の「命婦のお許」を、お守り役の命婦が、「翁丸」という犬に威嚇させ、猫の首にかみつかせるところからはじまる。「翁丸」は天皇の命で追放される。しかし、三日後、帰ってきた犬を蔵人たちがひどく打擲する。腫れ上がり苦しうになってもまた戻ってきた犬を、初めは「翁丸」ではないと判断するが、翌朝、「翁丸」のことを哀れむ清少納言の言葉に応えるように、その犬が震え声でなき、「翁丸」であったことが判明する。

森三郎の話では、「枕草子」の中に出てくる、「翁丸」のことをよく見知っている「右近の内侍」に、大事な役割を与えている。「枕草子」では、傷ついた「翁丸」を「右近の内侍」は、似ているが別の犬だと言っている。しかし、森三郎は、右近が実はちゃんと分かっていたのに、「翁丸がまた折檻されること」をおそれ、見て見ないふりをした」という述懐を清少納言に向かつてさせている。そして、「まあ、おやさしい右近さん」と清少納言に言わせている。ここは森三郎の人柄を思わせる重要な会話である。作品を通して、次第に三郎さんが見えてくる。

「藤五三郎」は造り酒屋をしているおばさんのところに、毎春秋には酒作りの手伝いに行く藤五三郎という男の話である。手伝いに行っても雀の涙ほどのお金をくれるだけで、お酒は一しずくも飲ませてもらっていない。そこで、三郎は、今年こそは何としても、あきれられるほどお酒をのんでやりたいものだ、あれこれ考える。そして、鬼の面をかぶっておばさんをおどし、上等の初酒をせしめ、酔いつぶれてしまう。どうも変だと思ったおばさんにすっかりばれてしまい、

「やは、ごめんない。ごめんない。」と藤五三郎は頭を抱えて逃げ出してしまう、という話である。

最後の場面は、逃げる藤五三郎と、追うおばさんの姿が目に見えるように、「やるまいぞ、やるまいぞ。」という声も聞こえるような気がした。これは、狂言仕立てで、きっと元の狂言の話があるに違いないと、「読む会」に集まった一同、感想を語り合った。

探してみると、「狂言記」(新 日本古典文学大系 岩波書店)の中に、まさにそのものずばり、「伯母ケ酒」という狂言があることが分かった。

「赤い鳥」昭和六年九月号の「るぐひ太郎」も狂言「居杭」を元にした作品であった。しかし、「るぐひ太郎」に比べ、今回の「藤五三郎」は森三郎の創作部分がずっと多くなっている。

「犬」でもそうであったが、元にする話があっても、森三郎の持ち味を出す工夫が次第に実ってきているように思う。

「犬」の話の後でこの「藤五三郎」を読むと、楽しい話で、一同笑い出してしまった。この『赤い鳥』昭和七年九月号には、いろいろの筆名を使いながら、四編もの作品が載っている。ジャンルも多岐にわたっていて、創作活動が充実してきた時代だと言えるだろう。

次回予定 2月14日(金) 午後1時〜3時

「雁(がん)」「赤い鳥」昭和7年10月号初出作品

「榎の僧正(えのきのそうじょう)」

『赤い鳥』昭和7年11月号初出作品